

# 長谷川雪旦筆「四季耕作図屏風」の基礎的検討

河野通明

A Basic Examination of Hasegawa Settan's "Folding Screen Depicting Rice Cultivation in the Four Seasons"

はじめに

- ①研究史の概観
- ②作品の概要
- ③描かれた内容の検討
- ④作品の成立事情の検討
- ⑤屏風に込められた作者のメッセージ
- ⑥四季耕作図史への位置づけ
- ⑦農作業の写実度の検討
- おわりに

## [論文構成]

本稿は、江戸時代後期の南関東の農村を写実的に描いた作品として注目される長谷川雪旦筆「四季耕作図屏風」（佐賀県立博物館蔵）の基礎的検討を試みたものである。この作品は雪旦が六歳の天保九年（一八三八）に『相中留恩記略』の著者として知られる相模國渡内村の名主福原高峰の依頼によって描かれたものとされており、左隻にも右隻にも福原家屋敷を大きく描き、福原家の庭で始まつた稲作が広い田圃で展開し、再び福原家の庭に刈り納められて脱穀・調製されて蔵に収納されるという構図で福原家の繁栄を表す、さらに郷倉への年貢の収納、城下への積み出しを描いて、徳川の治世の繁栄を表している。本屏風の描写は細密を極め、農具の描き方にはやや問題があるものの、江戸時代後期の南関東の農業や民俗を写実的に描いた作品であり、本屏風を資料として農業技術史や民俗学の今後の研究の展開が期待される。